

すべては部分である。

松田静心の『金色の森』展は、そのことを知らせている。

近視眼的であることがどこか愚かなことであると思いたがるわたしたちは、ついつい物事を、世界を、地球を、人類を、生態系を、俯瞰で眺めたつもりになったり、じぶんだけは宇宙の真理を悟ったかのような気分になりがちだが、都合良く全体を見渡す視座の錯覚こそ愚かな転倒に他ならない。

わたしたちは生まれてこのかた、全体なるものを見たことがなく、たとえ概念としてもそこに近づいたことなど、ただの一度もない。

すべては部分であり、局所にすぎない。部分から全体を想像することなど本当はできないし、ただ、ある方向から、ある限定されたなにかを見ているだけのことなのだ。どんなに晴れやかな状態も、どんなにすみきった環境も、すべてを見通すことを可能にするわけではない。

それを諦めとしてではなく、すこやかな展望として、『金色の森』は見せている。わたしたちの視点は部分をとらえることしかできないのだから、表からとか裏からとか上手（かみて）からとか下手（しもて）からとか、そうした方向やベクトル、あるいはステージやレイヤーなどの束縛を受ける必要はない。ただ部分を部分としてだけ見つめる勇気。ひたすら局所を局所のままに受けとる矜持。ひそやかでおっとりとした作品群は、わたしたちに内在している意識の多様性を引き出し、はぐくんでみせる。

なにを見ているか、あるいは、どのように見ているか、そうしたことを意識させないという意味において、この作品群は真のリラクゼーションを付与する。

わたしたちは愚かではない。

特別すぐれているわけではないが、少なくとも愚かではないのだ。混迷と荒廃の時代において、この報せはささやかで大切な救済をもたらすだろう。わたしたちは、大仰なことを待ち望んでいるわけではなかった。何事かにしばられることなく、部分を、局所を、ただ見ることがいかにすばらしいことか。松田静心ならではの色彩が、飛沫が、ラインが、飛翔が、そして金色が、じっと、わたしたちを祝福している。

2024年11月24日

映画批評家 相田冬二